草津市山寺町

北谷古墳群発掘調査概報

昭和三十六年三月

草津市山寺町

北谷古墳群発掘調査概報

滋賀県教育委員会

210.2
M
61

序

このたび名神高速道路瀬田栗東間の建設工事が施行せられるに当り、その工事に必要な土取場として、草津市山寺町北谷の丘陵が削り取られることとなった。この丘陵には古墳が散在していたので、工事施行前に発掘調査をする必要があった。このため日本道路公団名神高速道路滋賀建設所長（後に、日本道路公団名神高速道路第一建設局長）より、県教育委員会に発掘調査を委託された。この契約により、当教育委員会が発掘調査を担当することとなり、当課主事西田弘を調査員として調査を行うこととした。調査は各方面の御協力により、所期の目的を達し、出土遺物の調査整理も、この程その主要なものについて終了したので、ここにその概要を印刷に附し、広く関係各方面に御報告すると共に、改めて発掘調査に御協力を賜わった関係各位に篤くお礼を申述べたい。

昭和三十六年三月

滋賀県教育委員会事務局

社会教育課

草津市山寺町

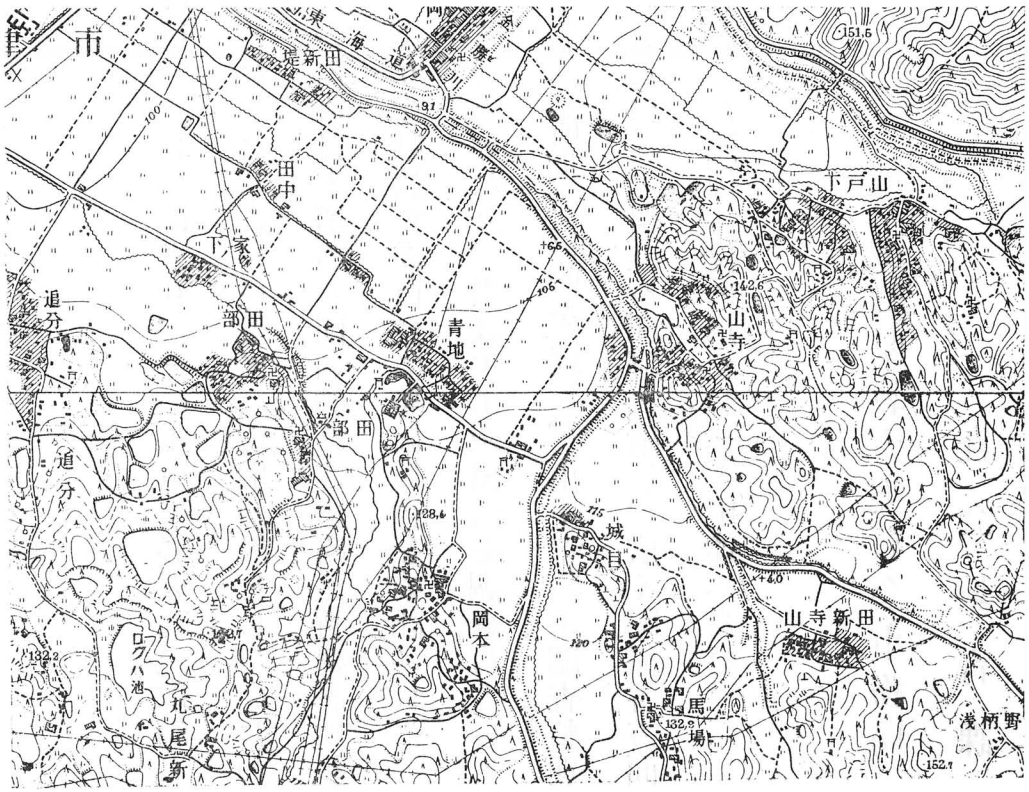
北谷古墳群発掘調査概報

名神高速道路建設のための土取場として、草津市山寺町の北谷丘陵が決定した際、日本道路公団の瀬田栗東工事事務所より、同地が古墳の群集地であることが、当教育委員会に連絡された。そこで当教育委員会が日本道路公団よりの委託をうけて、これらの古墳群の事前発掘調査を行うこととなり、西田弘が調査を担当することとなった。

この調査に要する経費は、すべて日本道路公団が負担し、これを県教育委員会に委託した。金額は第一次契約に於て二五万円、第二次契約に於て一五万円、計四〇万円である。

調査の実施に当っては、公団側の道路工事計画に合わせて、第一次は昭和三五年五月一六日から同月三一日まで、第二次は七月四日から一八日まで、第三次は八月一七日から九月二日まで、第四次は一〇月二五日から二七日まで、四回にわけて行った。

なお調査に当っては、京都大学助教授樋口隆康氏、京都国立博物館技官鈴木博司氏より、種々御教示をいただいた。又、日本道路公団名神高速道路第一建設局、同局瀬田栗東工事事務所の職員各位、草津市長、同市教育長を始め同市関係職員各位より御協力をいただき、発掘に当っては、地元山寺町の奥村善之助区長をはじめ区民各位、草津高等学校教諭奥村修、市川登、北川昭一の各氏及び同校生徒諸君、滋賀県立産業文化館技師宇野茂樹氏、江南洋氏、早川和彦君、広部長之君、から多大の御援助をうけた。人骨の調査については大阪市立大学医学部島五郎教授の御協力を得た。又遺物整理については、滋賀県教育委員会所管の重要文化財日吉大社東照宮修理事務所の北村主任はじめ職員及び勤務者各位の御協力を得た。ここに記して深甚の謝意を表わす次第である。わけても瀬田栗東工事事務所の中西利弘嘱託は、事務連絡、設営、発掘調査、遺物整理等あらゆる面に於て、連日御協力をいただき、調



発掘調査附近地形図　1/25,000

査の遂行に多大の便宜を与えられたことは感謝にたえない。

発掘は一六の地点に於て行ったので、各地点別に概報の記述を行うこととする。なお発掘地点がすべて古墳ではないため、地点符号と別に古墳番号を付けることとした。又、当報告書に於ては、制限された紙数その他のため、詳細にわたることが出来ず、かつ実測図類はすべて割愛せざるを得なかったことは、誠に残念である。

草津川と金勝川の溪谷によって区切られた金勝山塊が、北にのびて湖岸平野にのぞむ小丘が遺跡地である。西は草津川をはさんで追分・岡本の古墳群に対し、東は丘陵続きに下戸山の古墳群につらなり、金勝川をこえて北東は川辺・安養寺・小野・六地蔵の栗東古墳群に続いている。なお丘陵の突端から数百米離れた水田中に、かつて周湟をめぐらしたと思われる一円墳がある。従ってこの古墳群はこのような湖南古墳群の一部として、他の古墳群との関連に於て究明されるべきものであるが、このことについては他日を期したい。

A　地　点

土取に伴う工事用道路予定地にあたり、一応トレンチを入れたが、何ら遺構遺物は認められず、工事により破壊される部分も少いので調査を打切る。

B　地　点　（第一号墳）―（図版第五）

北谷丘陵の突端部にあり、幅のせまい尾根に盛土したらしく、盛土は東側の斜面に多く認められた。封土の地表下約六〇糎で、粘土で被覆された主体部が発見された。主体部の大きさは、棺の長さ四米一〇糎、幅約五五糎、粘土の被覆を加えて長さ四米七五糎、幅約一米、高さ約三五糎である。粘土は青色粘土を用い、粘土床の下に約一五糎の厚さに小石を敷きつめた排水設備が施されていた。遺物は非常に少く、頭部に細長い鉄製品が一本発見されただけで、足の方に鉄銹が認められたが遺物は遺存しなかった。全体にわたり朱を塗っていたことが認められた。墳丘には葺石や埴輪の存在が認められなかった。

C　地　点　（第二号墳）

横穴石室の古墳らしいが石材はすっかり運び去られ、底部と推測されるあたりから遺物らしい土器片や鉄製品の残片が若干発見されただけである。

この地点とD地点の中間の凹所のC地点よりの処から、調査後の土取作業中に、須恵器の大形土器や高杯・提瓶、土師器破片等が黒色腐蝕土中に発見された。ブルドーザーで表土を除去した際出土したもので、遺跡の性質を知ることは出来なかったが、これをとりまく古墳のいずれかに対する祭祀関係のものと考えられる。

主な出土品

須恵器（図版第十六）――大形土器一　高杯五　提瓶一

D　地　点　（第三号墳）

周囲よりやや高く盛土状をなしていた。地表下一米三〇糎で地山の層に達したが、地表から地山までの間に黒色腐蝕土の薄層が三層あり、第二と第三の腐蝕土層の間の薄い粘土層の直上から土器が出土した。土器はすべて土師器の小破片である。

調査終了後の土取作業の際、この附近の傾斜面から石室の一部と思われる石材や土器が出土した。しかしこれは機械による土取作業の間に作業員により認められたものであるため、正確な遺跡の推定は不可能であるが、このためこの地点も石室を持った古墳の石室が殆んど崩壊したもので、先に調査した部分は、この石室を覆う盛土の一部であったと推測された。

E　地　点　（第四号墳）―（図版第五）

横穴石室の古墳で天井石はすべて無く、奥壁と北壁は上半部が無く、南壁は殆んど存しない。羨道部は崩壊して詳細は不明である。玄室の底面には石が敷かれている。遺物の遺存は比較的良好である。玄室の大きさは長さ四米三〇糎、幅は羨道部につづく部分で一米八〇糎、奥壁部で一米四五糎、高さは不明である。羨道部との接続は片袖式と思われる。遺物は装身具と鉄器類は玄室の北側に多く、土器は南側に多く、主として須恵器を奥に土師器を羨道近くに置いている。

主な出土品

装身具（図版第十三）――金環二　銅環二　硬玉勾玉一　碧玉管玉二　ガラス小玉五

鉄器（図版第十二第十三第十四）――鉄鏃九　刀子六　刀残欠二　その他の鉄器類

須恵器（図版第十六）――広口壺一　鐙一　高杯一　台付壺一同蓋一

土師器（図版第十六）――椀四　高杯五　壺一

F　地　点　（第五号墳）―（図版第六）

横穴石室で、天井石は最も奥の一個が遺存し、他に一個落ち込んでいた。壁は奥壁部を残して他は上半が無く、羨道部も一部崩れていた。片袖式で羨道部は玄室より一段高くなっている。室底には石が敷かれていた。遺物の遺存は良好である。大きさは玄室の長さ三米三〇糎、幅一米六〇糎、高さ一米九〇糎、羨道は幅八〇糎、玄室との高さの差は約二五糎、羨道の高さ長さ共に不明である。玄室内の両壁にそって人骨が出土した。遺物は、装身具は人骨に伴出したものが多く、鉄器、馬具、土器等は入口より向って右側の奥と、左側の袖の部分に多く、鉄器の一部は左壁下人骨附近に出土した。奥壁の土器は人骨や鉄器の上に重って発見されたが、奥壁や奥壁に近い側壁の中間高さ約六〇糎の処に、扁平な石を壁石の間に突きさし、あたかもその上に板などを載せたような状態が見られたので、或は土器はその板に載せてあったとも考えられた。羨道部にも土器や鉄器が若干見られた。

主な出土品

装身具（図版第十三）――銀環二　銅環二　ガラス小玉一　琥珀玉一五

鉄器（図版第十二・第十三・第十四）――鉄鏃一一　刀一　刀子三　その他　外に銅鏃一

馬具（図版第十五）――轡一　雲珠一　その他

須恵器（図版第十七・第十八）――平瓶一　横瓮二　直口壺一　鐙四　提瓶三　台付壺一　高杯三　杯身七　杯蓋六　皿一　椀一

土師器（図版第十八）――大形高杯二　高杯一

G　地　点　（第六号墳）

横穴石室で、天井石はすべて無く、羨道部も崩壊して無くなっていた。玄室の大きさは、長さ四米二〇糎、幅は奥で一米五〇糎、入口で一米七〇糎、高さは約一米八〇糎と推測される。底部には石が敷かれていた。壁の石が落ち込み底は非常に荒れて居り、遺物も散乱し原位置を推測することも出来ない程である。奥壁の左右の隅に土師器の高杯と坩が置かれていたのだけが原位置を示すもので、他の土器は入口の方に散らばっていた。装身具や鉄器馬具類も散乱していた。

主な出土品

装身具（図版第十三）――金環一　銀環三　水晶切子玉一　ガラス小玉六　金銅小玉一　土製小玉四一　琥珀玉二

鉄器（図版第十三・第十四）――鉄鏃三　刀子二　その他

馬具（図版第十五）――鍍金馬具（主として雲珠）破片　その他

須恵器（図版第十八・第十九）提瓶一　高杯一　杯身七　杯蓋九　皿二　椀二

土師器――高杯一　坩一　皿二

H　地　点　（第七号墳）―（図版第七）

この地点の立木の除去がおくれたため、調査がおくれた。機械力による土取作業の進展により立木も除去されたので、その作業の間隙をぬって調査を行った。このような事情から表土除去もブルドーザーで行うという非常手段をとり、底部の調査に重点をおいた。横穴石室で天井石はすべて無く、側壁も西壁は殆んど取り去られ、或は崩れ落ちていた。玄室の大きさは長さ四米三〇糎、幅一米八〇糎、高さは不明である。羨道部は幅約一米、長さは残存部で二米余であり、高さは不明である。片袖式で向って左側に袖のあるのも、第四号墳や第五号墳と同じである。底部はこの古墳群の他の石室と異なり、玉砂利を敷きつめて居り、更に玄室の中央より羨道に向い三〇糎前後の幅で、割石や自然石を並べた排水設備と推定されるものがあった。このような設備は此の附近の古墳では現在まで例を見ないものである。遺物は装身具、馬具、

鉄器、須恵器で、遺存は比較的良好である。

主な出土品

装身具（図版第十三）――銅環二　ガラス小玉二　土製小玉三〇　琥珀玉二

鉄器（図版第十二）――刀装具残欠　その他

馬具（図版第十五）――轡一

須恵器（図版第十九）――提瓶三　高杯三　瑞一　直口壺一　台付壺一　広口壺一　杯身二　杯蓋一

I　地　点　（第八号墳）

横穴石室と推定されるが石材はすべて無く、底に敷いたと思われる石が数個散在し、その間に土器や鉄器類が若干出土した。

主な出土品

鉄器（図版第十四）――工具類その他

須恵器（図版第二十）――提瓶一　杯蓋一　高杯一

J　地　点　（第九号墳）―（図版第七）

横穴石室で、天井石と思われる大石が二個落ち込んでいた。奥壁側壁ともに上半部は欠失している。従って高さは不明である。底部には石が敷かれ、玄室の長さ三米三〇糎、幅一米五〇糎、入口より向って右側に袖を持つ片袖式である。羨道部は幅約八〇糎、長さは不明である。遺物は装身具が中央部から発見されたが、土器は破壊散在が甚だしく、主として羨道部近くに散乱していた。

主な出土品

装身具（図版第十三）――銀環二　土製小玉六

鉄器（図版第十四）――鑿八　その他

須恵器（図版第二十）――広口壺一　高杯二

K　地　点

盛土して上面を平坦にしたと思われる遺跡であるが、盛土部分に遺物は全然発見されず、地表下約一米に溝状に黒色腐蝕土がたまった部分から、古い土師器の小破片が出土している。地元の老人からこの附近に往昔仏堂があったとの言い伝えが知らされたが、山上の小堂ならば建築も可能の広さがあり、盛土が溝状部分の上にあることも一応解釈が可能となる。しかし後世の遺物は何ら発見することは出来なかった。

L　地　点―（図版第七）

封土なくほぼ平坦な東西約一〇米南北約七米の部分で、表土の下はすぐ地山である。その北寄りに約八米にわたり、円筒埴輪が一列に並び、更に南寄りにも円筒埴輪の破片が数個発見された。その間に土器が散在しているが、その数は多くなく、完形品は有蓋杯一合のみで、出土の際は身と蓋は少し離れていた。この須恵器は時代が新しいと思われ埴輪との関係は不明である。その他古い土師器の破片も出土し、遺跡の性質は全く不明である。鉄器も少量出土している。

主な出土品――（図版第二十）

円筒埴輪破片

須恵器――杯身同蓋各一

M　地　点

L地点とN地点の中間を一応調査したのであるが、土器類の散乱が認められただけである。

N　地　点　（第一〇号墳）

封土を持ち中央部がくぼんで既掘の跡があった。深さ一米四〇糎ばかりで、石室の底に敷かれたと思われる石約一〇個と共に、土器破片数点が発見されただけで、石室の石材は一個も発見出来なかった。

O　地　点

P地点からのびた尾根がN地点との間にくぼみをつくる突端部である。表土下はすぐ地山になり、やや大ぶりの石が縦一米横五〇糎のほぼ矩形に並べてあり、その附近に土器が散乱していた。なおその石敷の間から打製石鏃が一個発見されたが、土器はすべて土師器や須恵器で、先史時代のものは見られなかった。なお念のため附近を精査したが、土器や石器は発見出来なかっ

た。

主な出土品

須恵器（図版第二十）――直口壺一

石鏃一

P　地　点（第一一号墳）―（図版第八・第九）

北谷丘陵の頂上にありこの古墳群最大の規模の墳丘である。調査の結果西南から西にかけて封土が崩壊していることがわかった。この崩壊のため主体部の後半が無くなっていた。葺石は東側ではよく遺存しており、埴輪の破片も発見された。なおこの地は阿弥陀堂と呼ばれているため、建築の遺構が発見されるのではないかと注意したが発見されなかった。堂が焼けたとの説もあったが、灰層その他焼けた痕跡は発見出来なかった。ただ室町時代にさかのぼると見られる瓦の外、素焼の土器などが葺石にまじって発見されたので、堂跡である確証は得られた。すなわち後世古墳の封土を利用して阿弥陀堂が建立せられたものである。

古墳の主体部は青粘土で覆われて居り、木棺は幅約七〇糎、長さは遺存している部分で四米三〇糎あった。棺端より一米三〇糎から一米九〇糎の間に仿製方格規矩鏡一面、鍬形石三個が納置されていた。鏡は鏡背を上にして居り、布で包まれていたようである。三個の鍬形石はすべて表を上にしていた。又二米三〇糎あたりから朱の層が非常に厚くなったが、遺物は前記以外は全然発見されなかった。鏡下附近は特に棺材の遺存状態がよかった。棺は厚い青色粘土で覆われており、壁の厚さも五〇糎乃至六〇糎で、上部の粘土の落ち込みも厚い所では五〇糎ほどあった。粘土床は、厚さ一〇糎余り、棺底から四〇糎ほどの高さのU字形の構造を持っている。粘土床の下は山粘土で排水設備は発見出来なかった。ただ粘土床の頭部に、東西六〇糎、南北は東端が五〇糎、西端で推定六五糎の梯形状に小石が薄く敷き並べてあった。槨外の北壁（正面）にそって鍬形石二個及び鉄剣・鉄鏃等の武器や木工具類が二群に分けて置かれ、南壁にそって数量は北側より少いが、鉄剣を主とした鉄器類が置かれていた。南北壁外の遺物の配置は互い違いにグループ別に置かれていた。主体は墳丘の軸に対し直角に作られ、軸の方位は約北三〇度西で第一号墳と殆んど同方位である。なお墳形が前方にのびた平坦部を含めて前方後円墳として形を整えたのかどうかを調査したが、前方後円である確証はなく、一応円墳と見るべきである。

主な出土品――（図版第十・第十一・第十二）

棺内　仿製方格規矩鏡一　鍬形石三

槨外北壁　鍬形石二　大形鉄剣一　鉄剣約一五　大形鉄鏃二　鉄鏃八

手斧一　刀子一　剣形小形鉄器二　その他用途不明鉄製品五

槨外南壁　鉄剣一二　剣形小形鉄器二　その他用途不明鉄製品二

後世寺院関係遺物　軒先平瓦一　素焼土器瓦破片

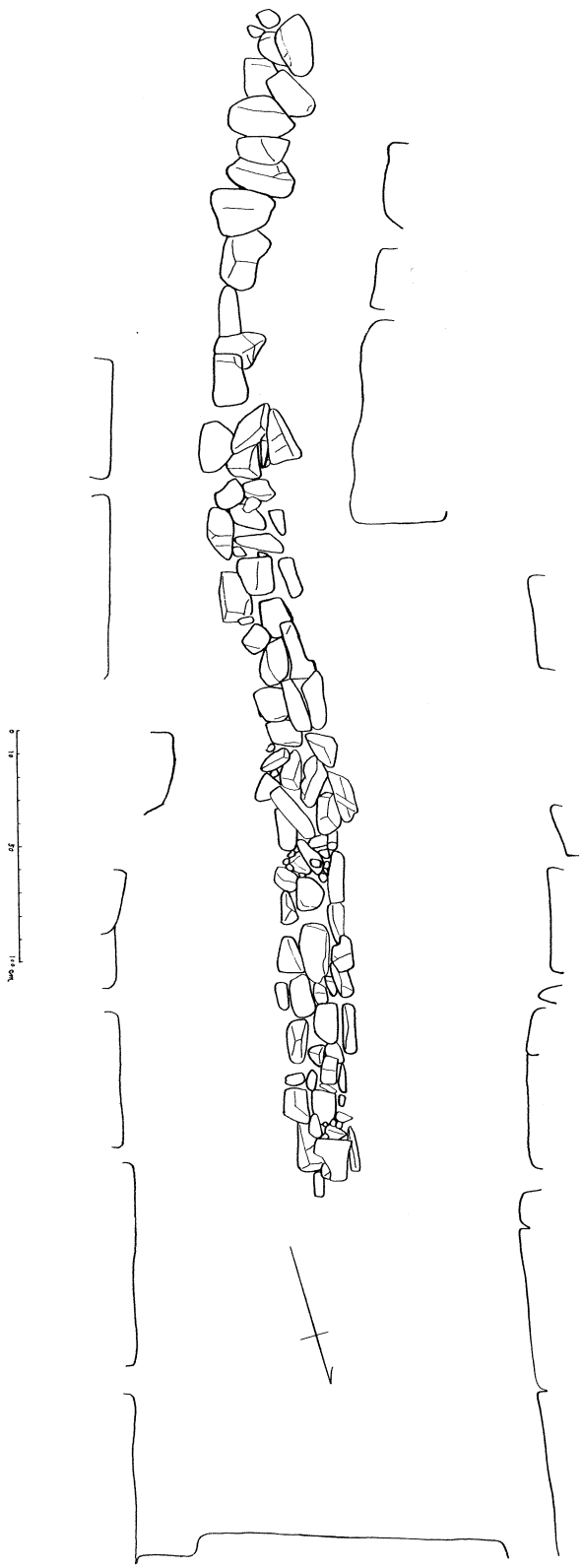
図

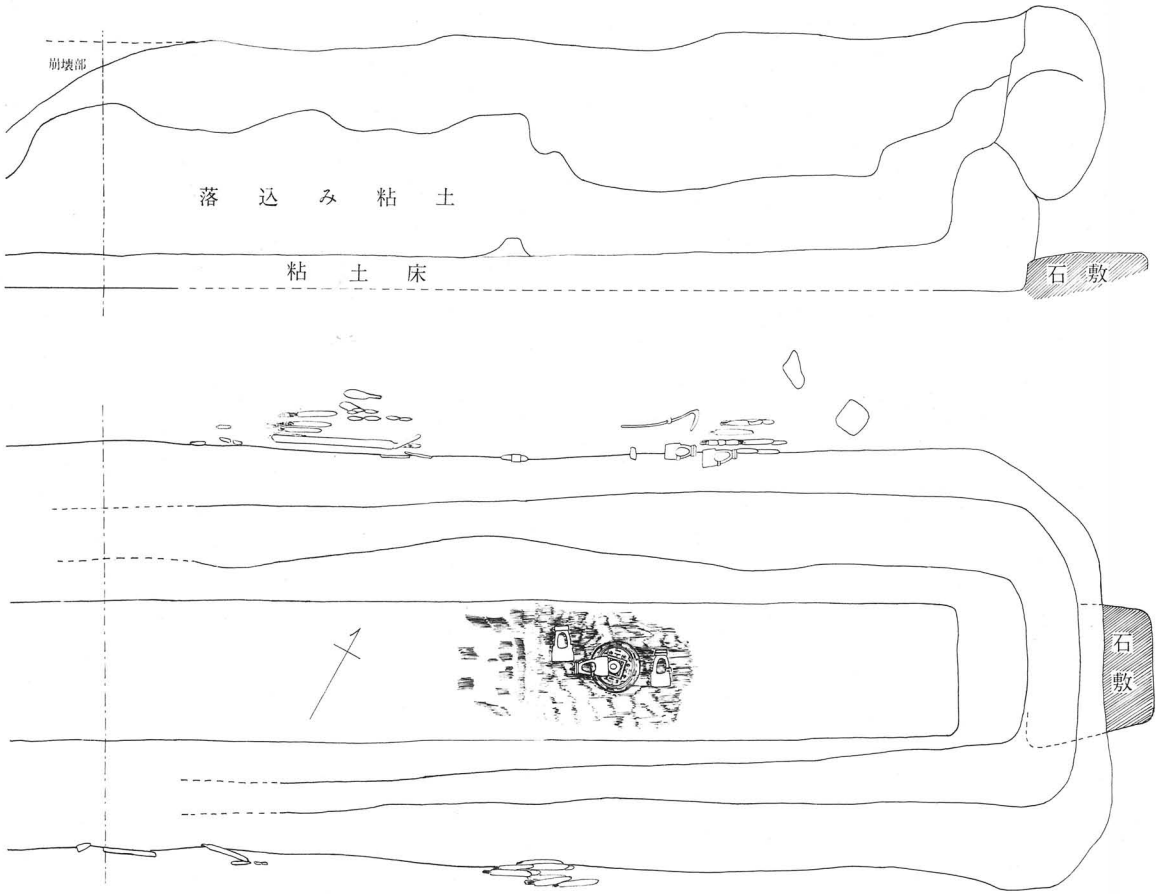
版

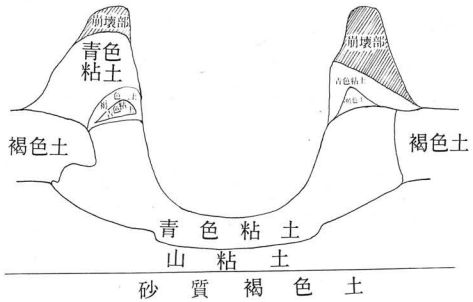
圖版第一　北谷古墳群実測図

圖版第二

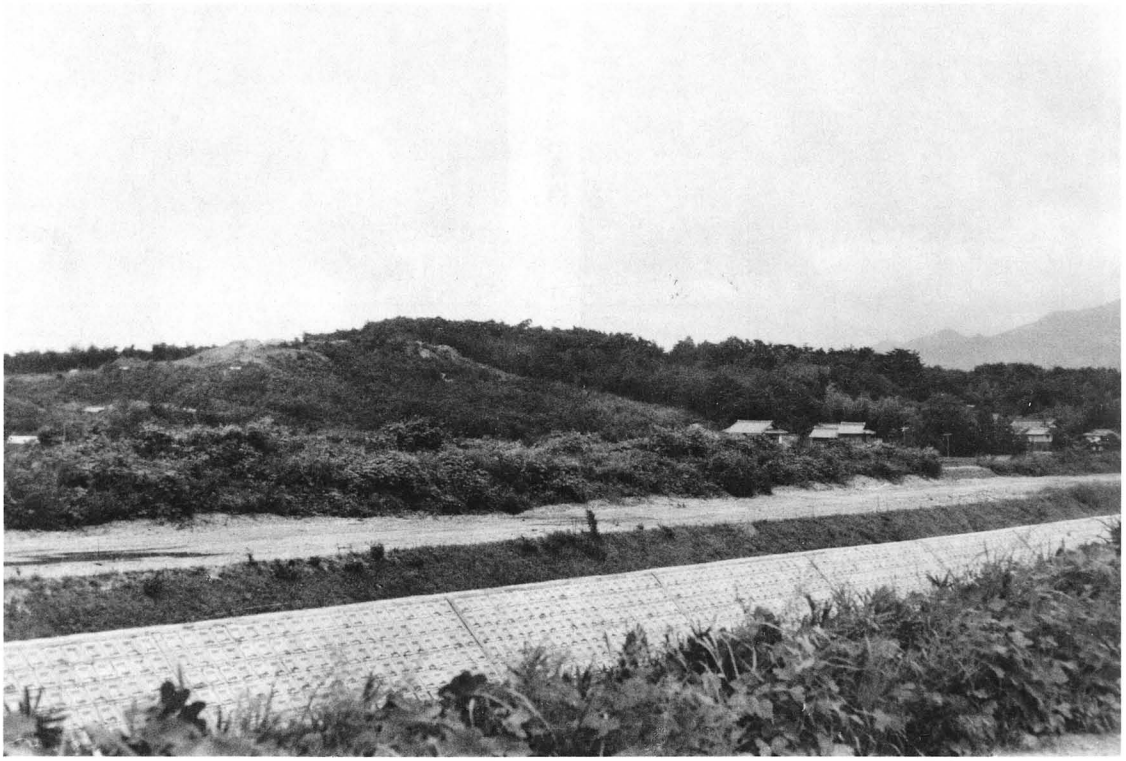
第七号墳排水設備実測図







圖版第三　第十一号墳実測図



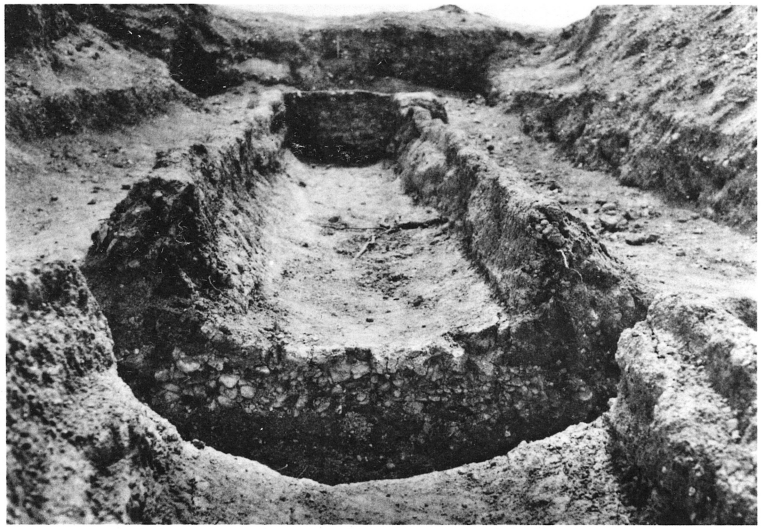
全景－西から（左方土の露出部分が第１～第６号墳）

全景－北東から（左端が第11号墳）

圖版第五

第 1 号墳粘土構造

第 4 号墳石室全景

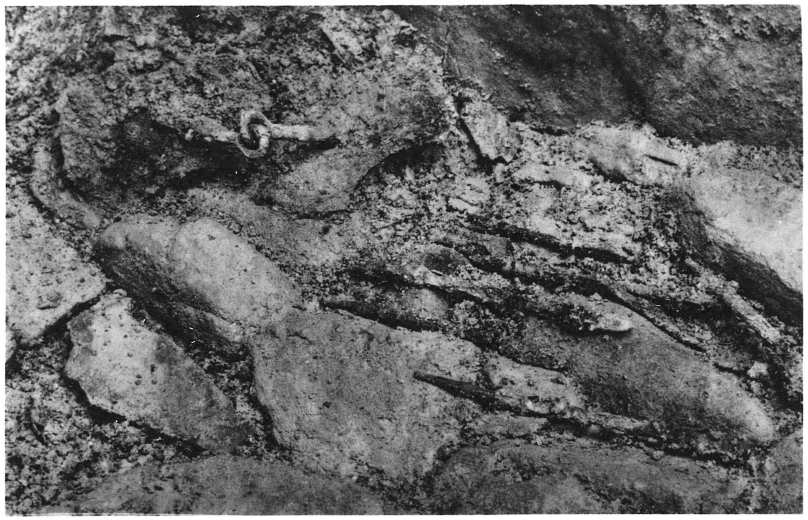


第 1 号墳粘土構造断面

第 4 号墳遺物出土状況

圖版第六

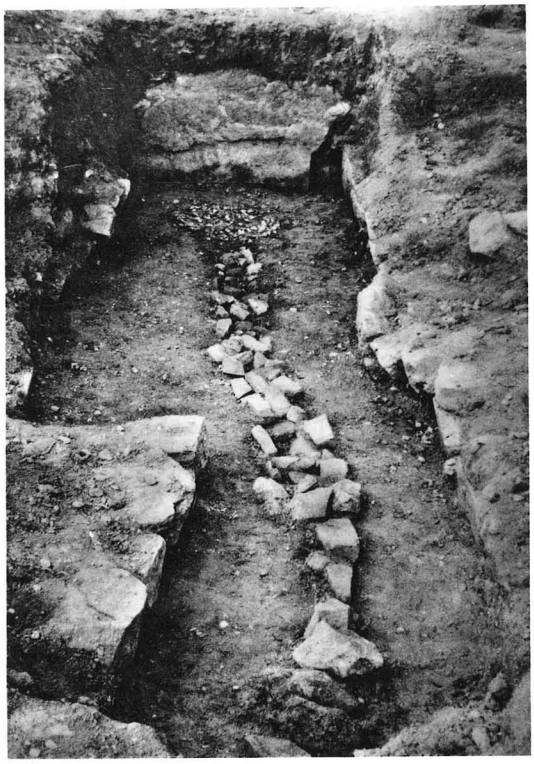
第5号墳石室奥壁部分



第5号墳遺物出土状況

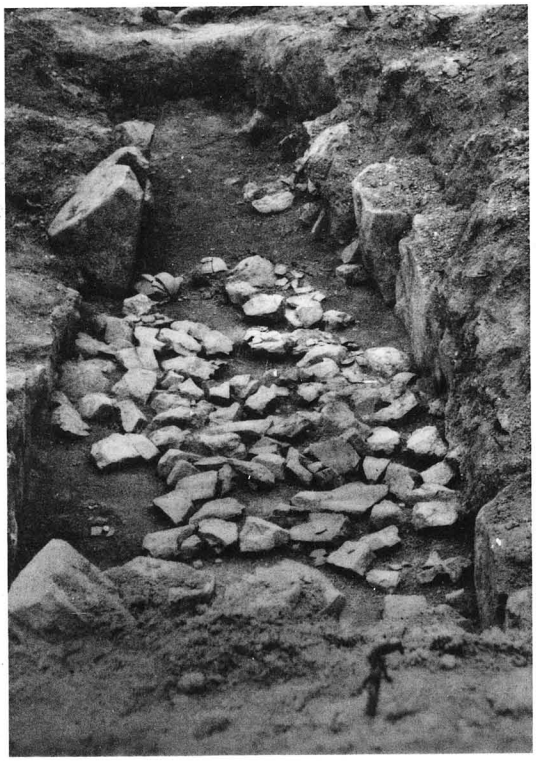
第5号墳石室羨道部

第5号墳遺物出土状況



第7号墳排水設備

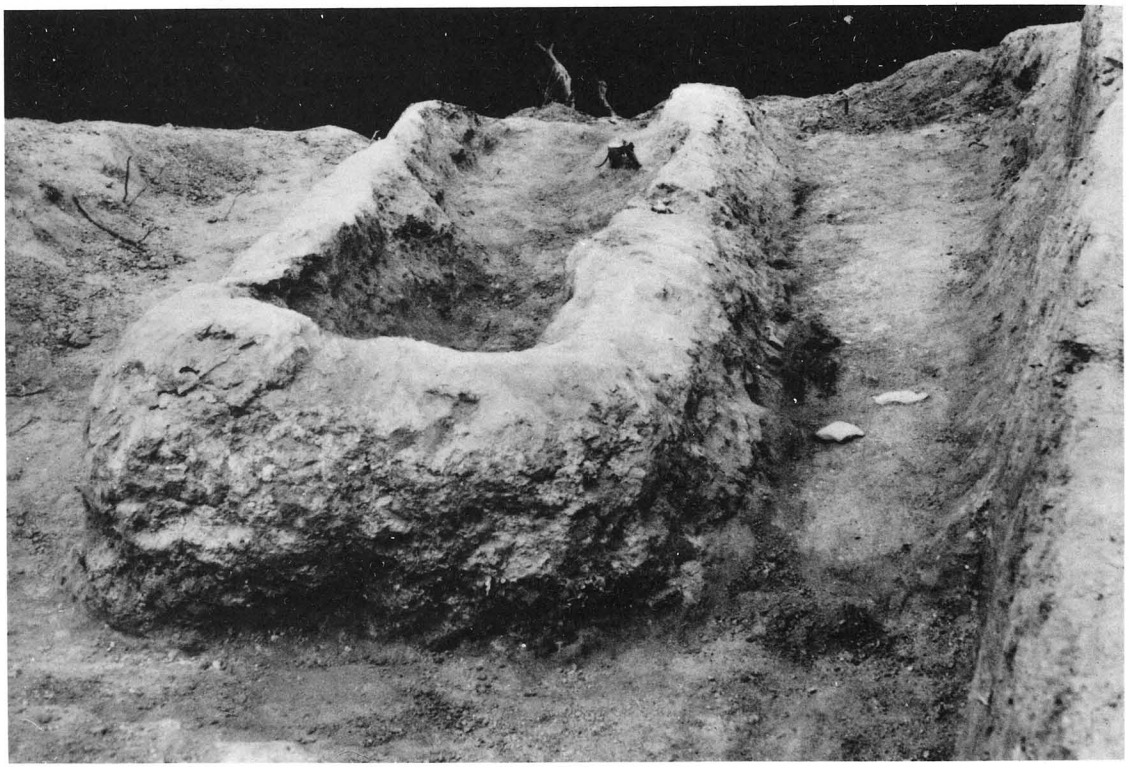
第7号墳遺物出土状況



第9号墳石室全景

L地点埴輪出土状況

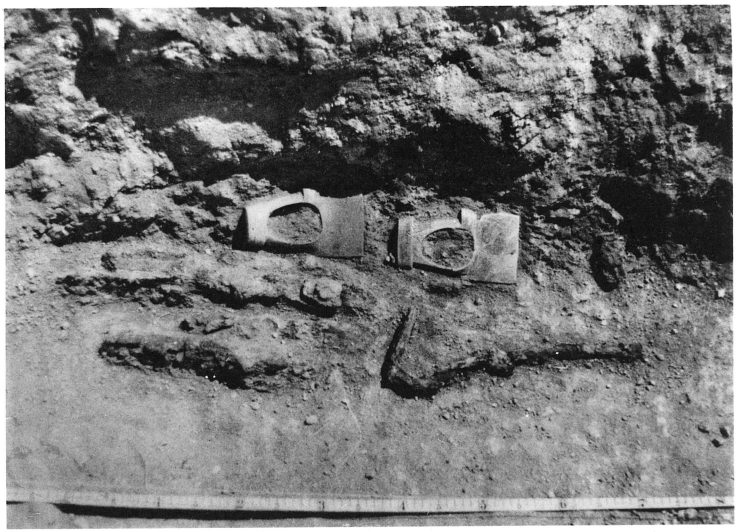
圖版第八



第11号墳粘土構造全景

第11号墳葺石出土状況

第11号墳棺内遺物出土状況

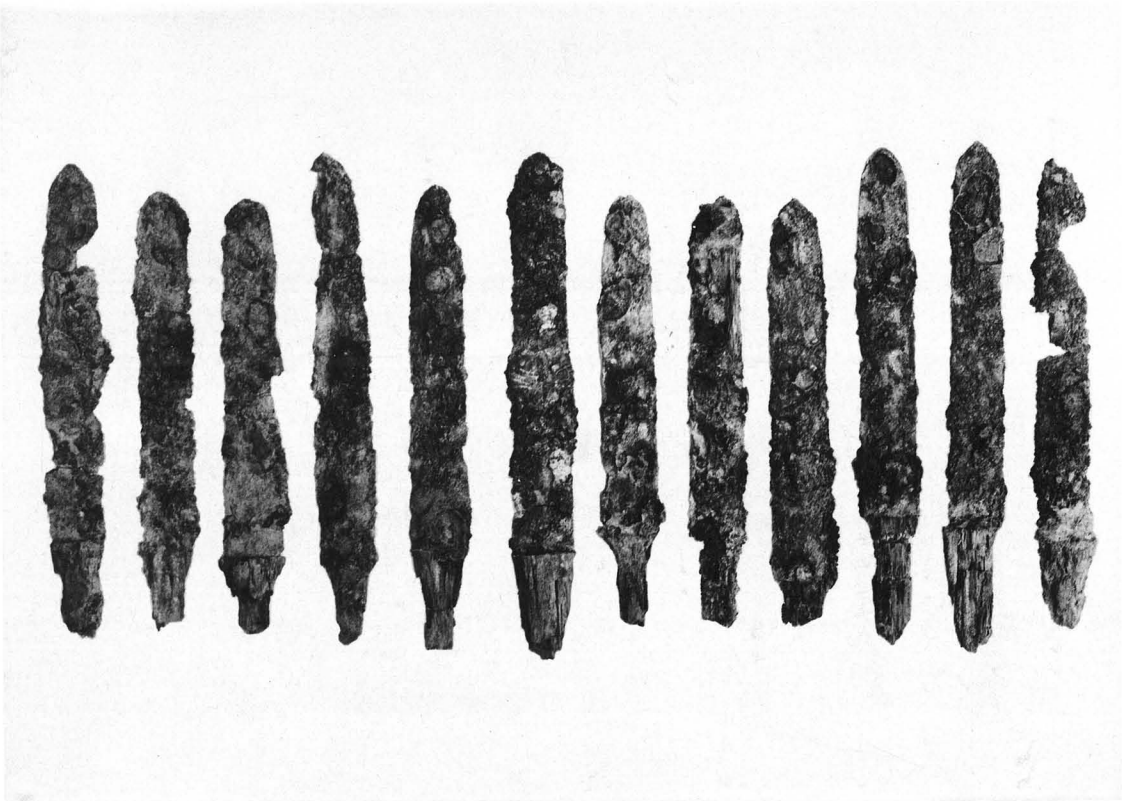


第11号墳槨外遺物出土状況

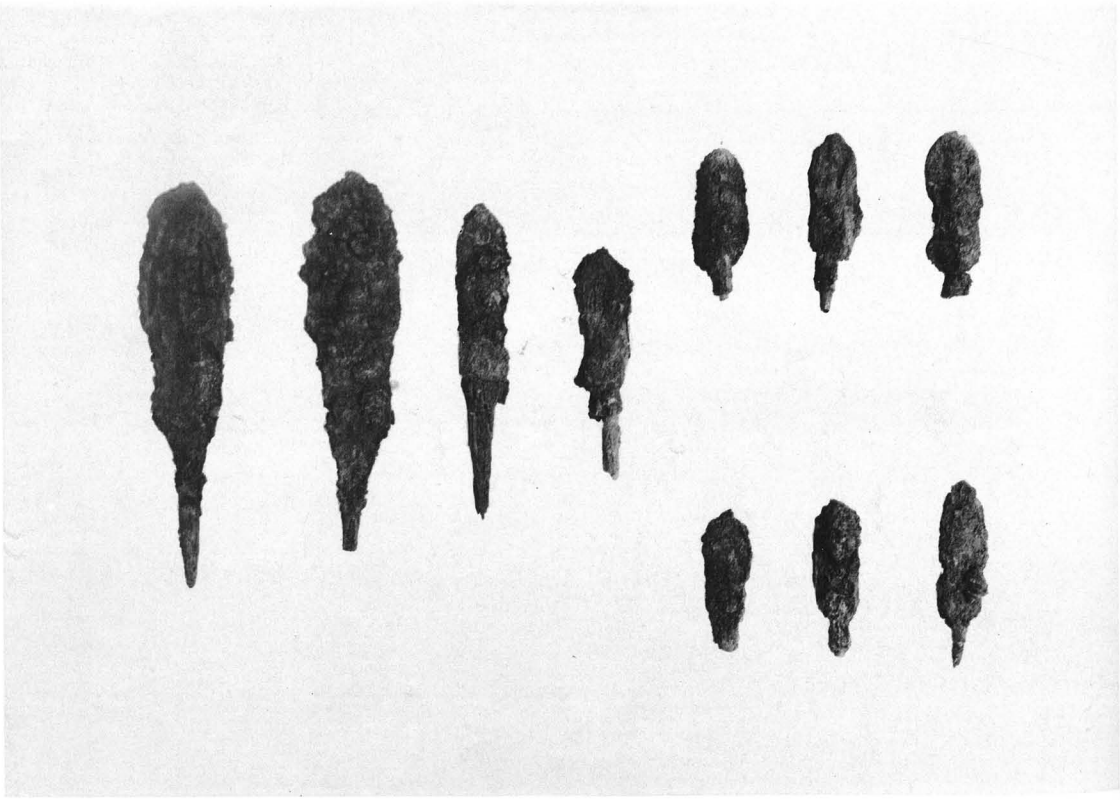
第11号墳槨頭の敷石出土状況

鏡　（第11号墳）

鍬形石（第11号墳）

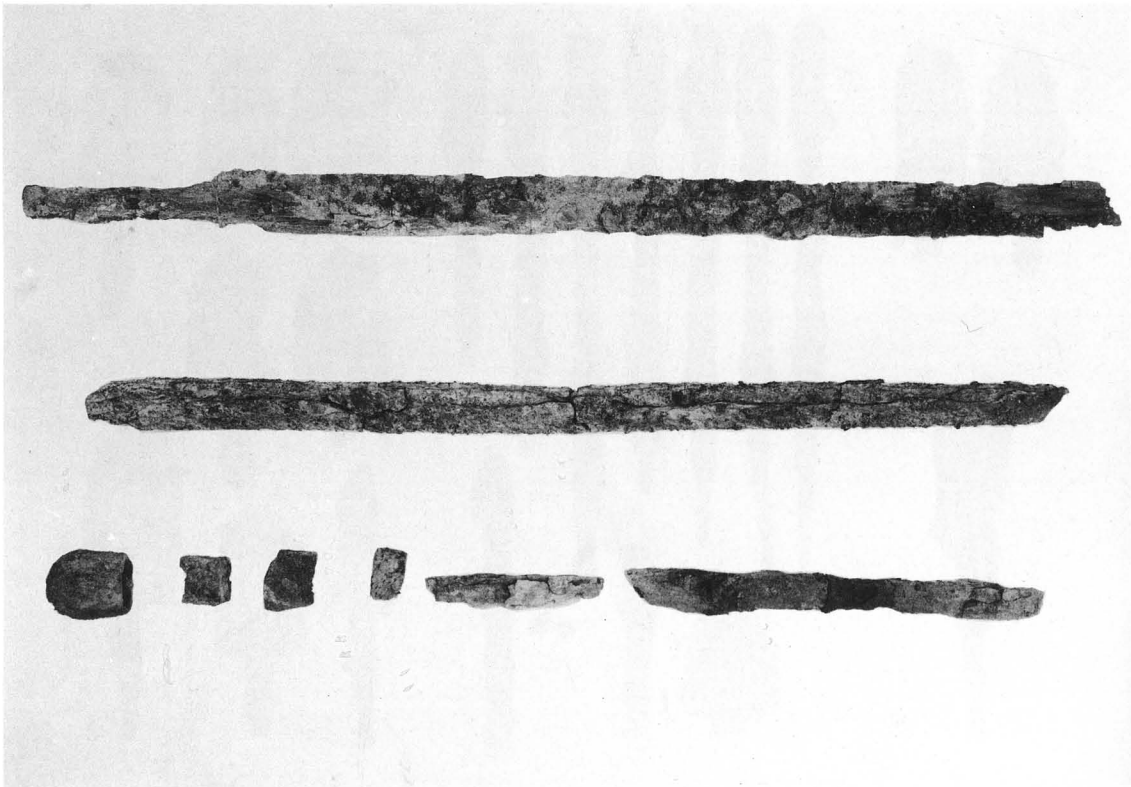


鉄剣（第11号墳）

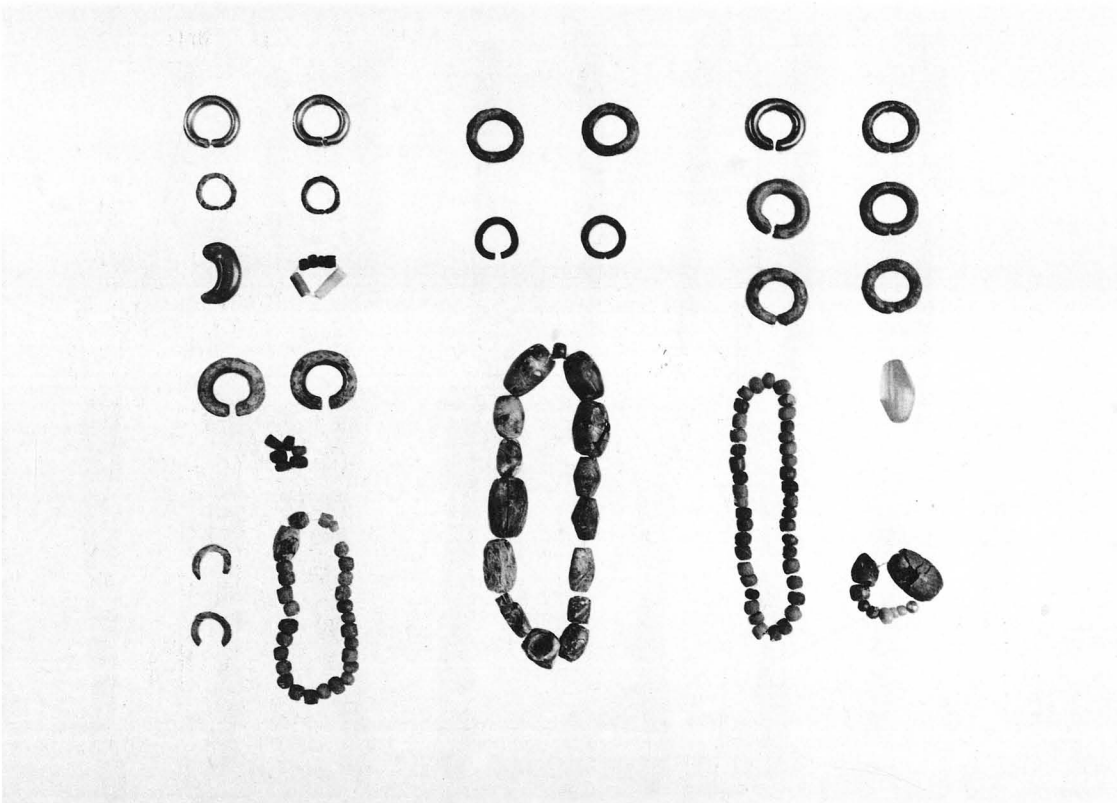


鉄鏃（第11号墳）

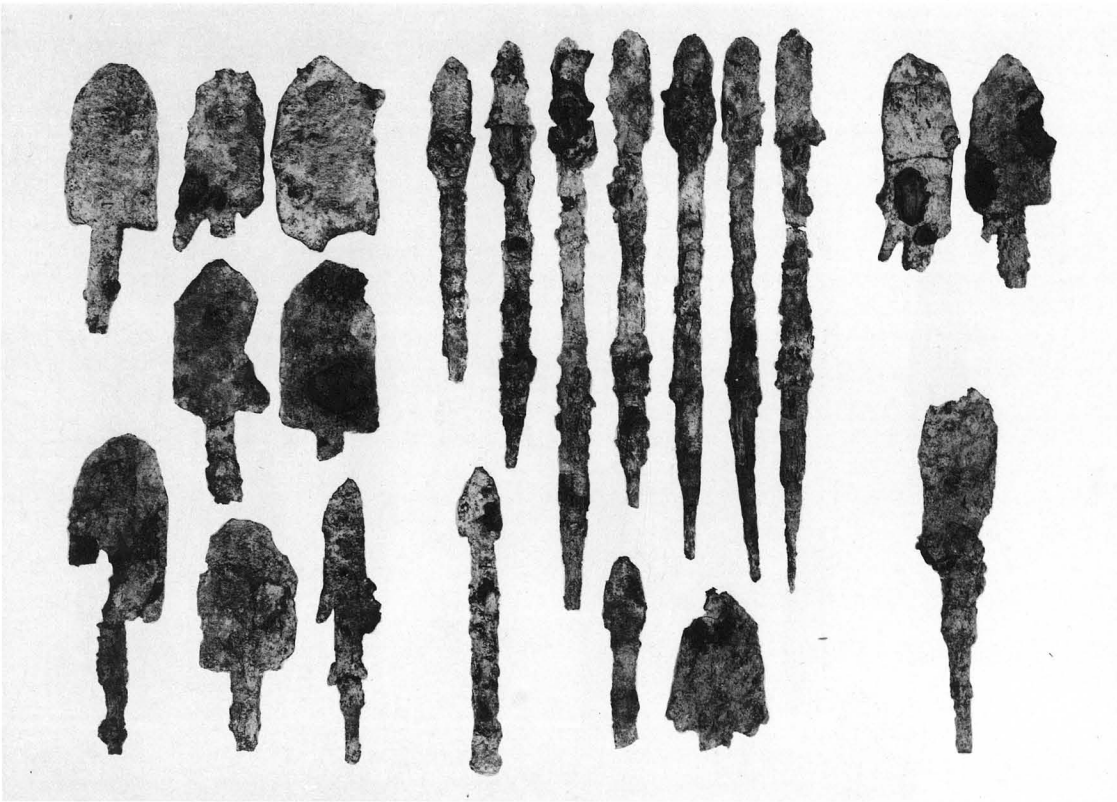
工具類（第11号墳）



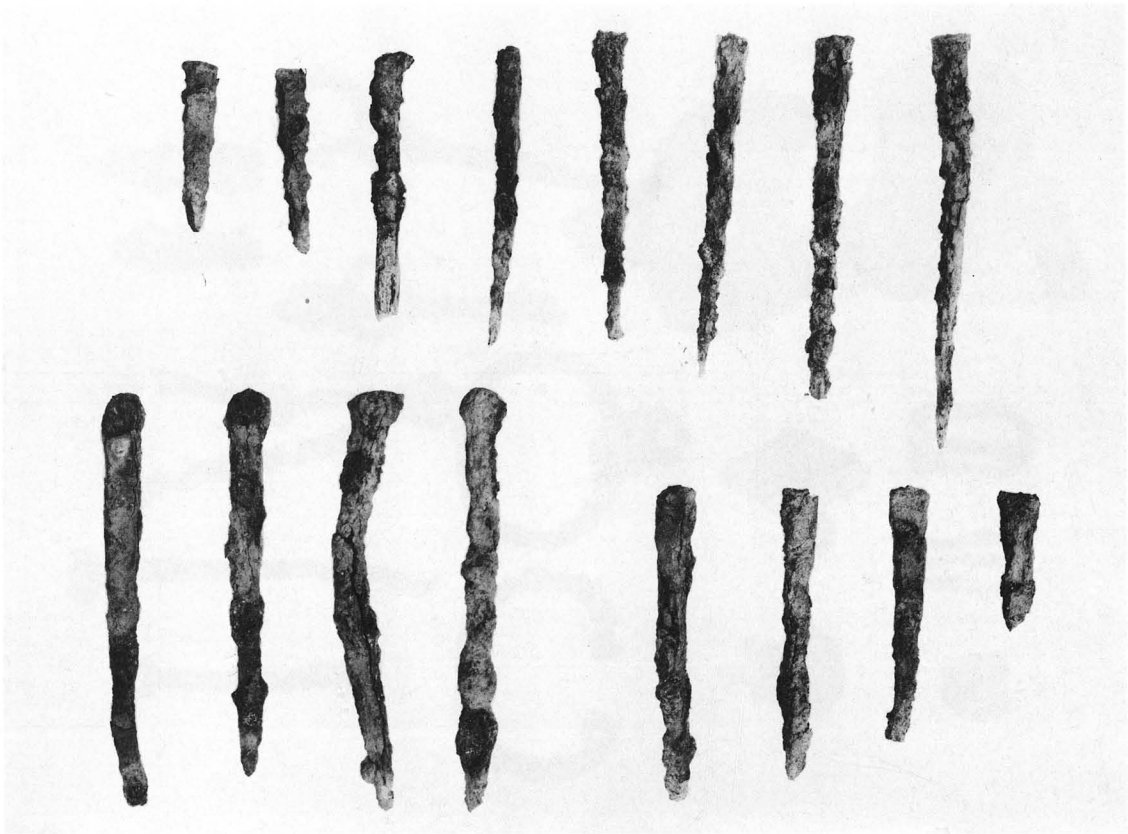
上 鉄剣（第11号墳）　中 鉄刀（第5号墳）　下左 鉄刀残欠（第4号墳）　下右 刀装具（第7号墳）



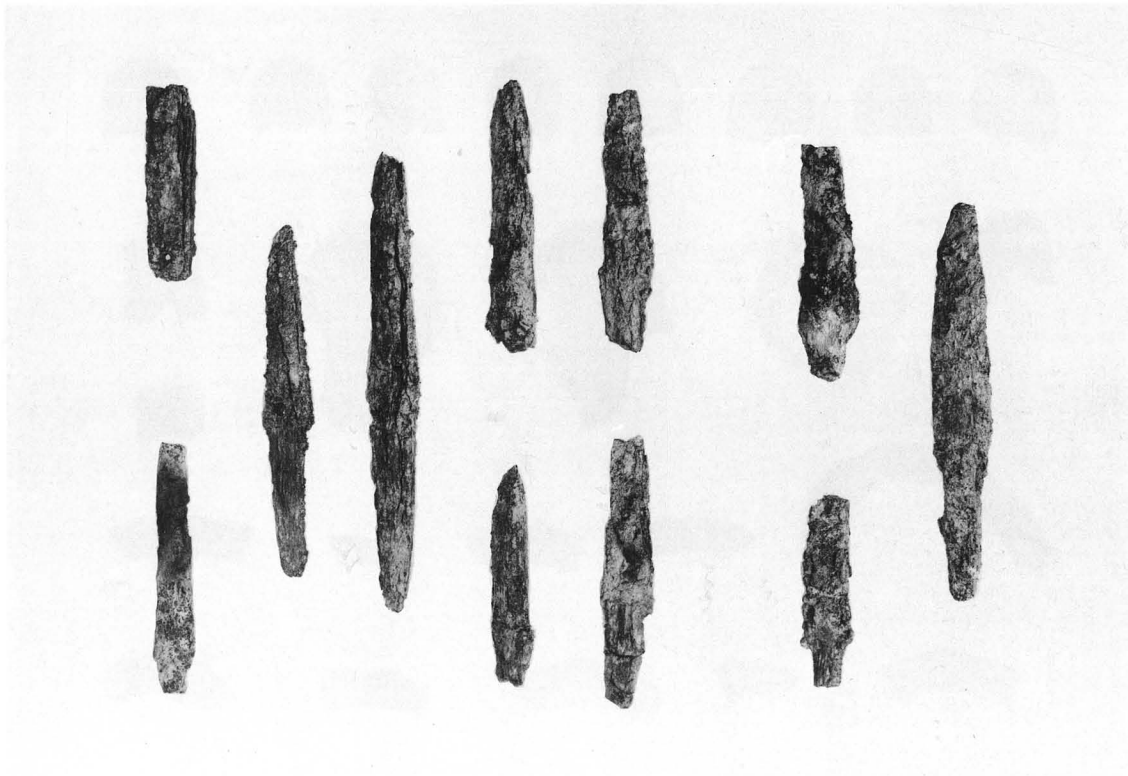
装身具　左上（第4号墳）　左中（第9号墳）　左下（第7号墳）　右　（第6号墳）（第5号墳）



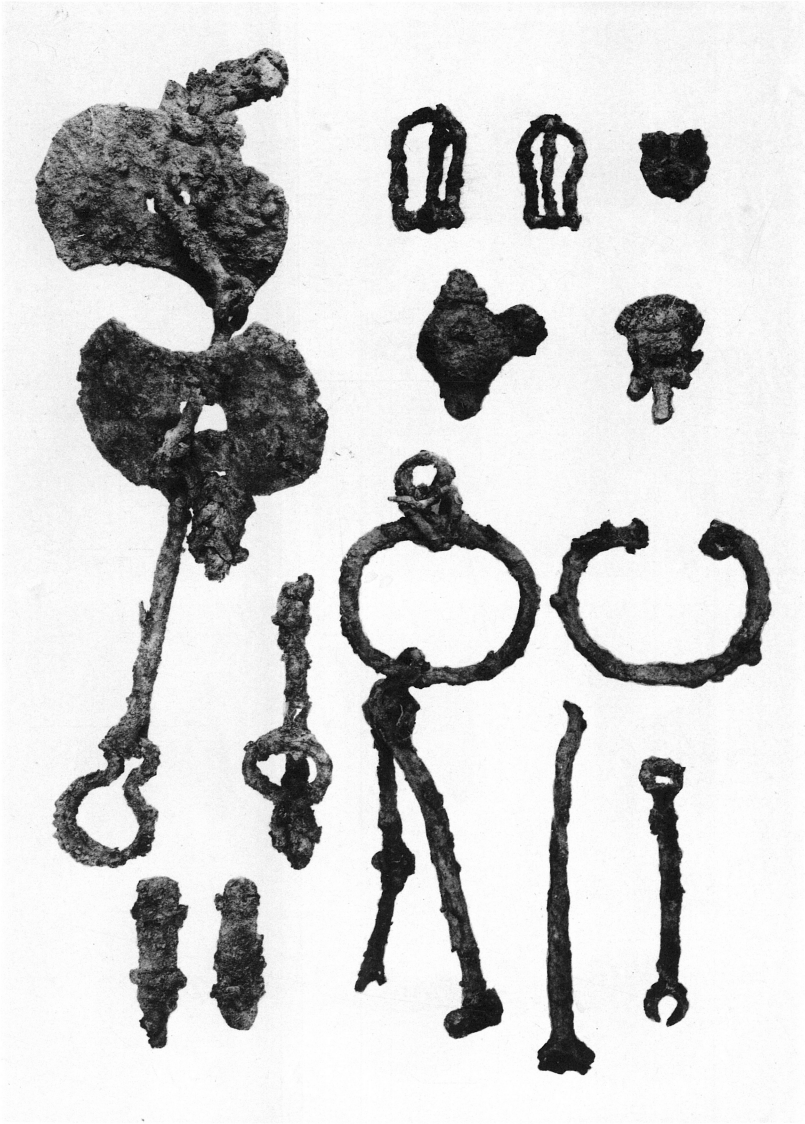
鉄鏃　左第4号墳　中第5号墳　右第6号墳



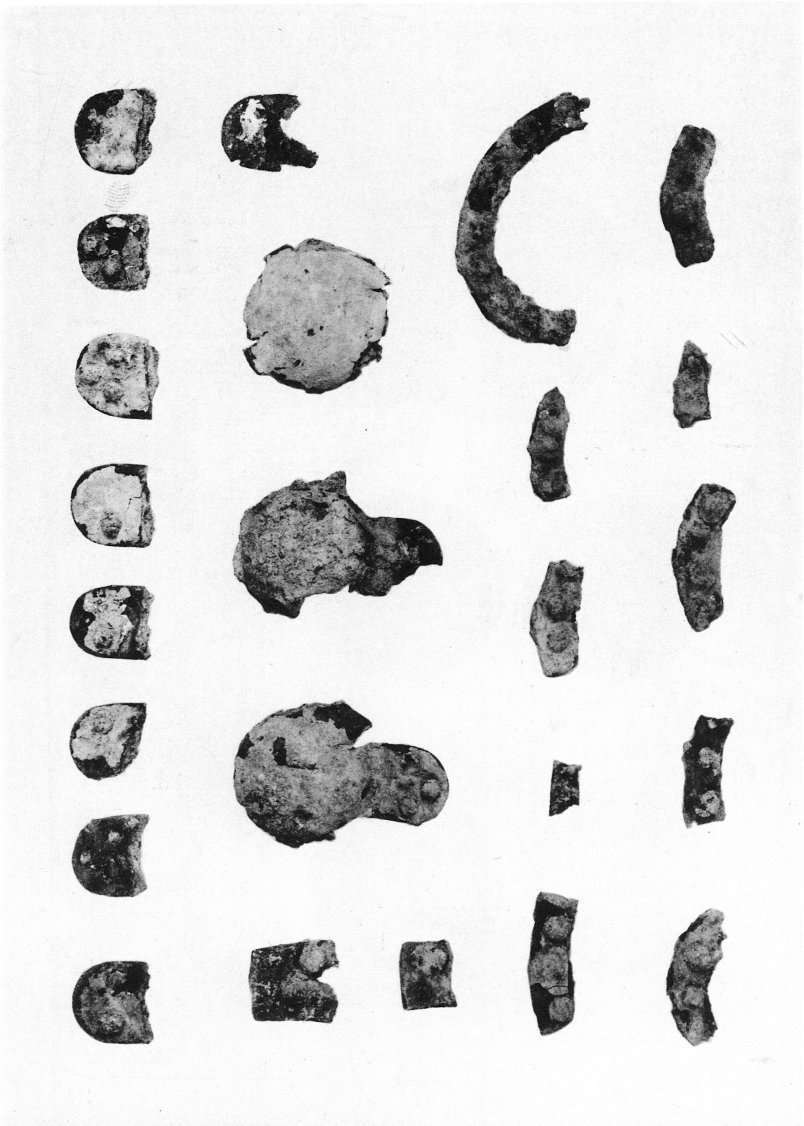
工具　上（第9号墳）　下左（第8号墳）　下右（第4号墳）



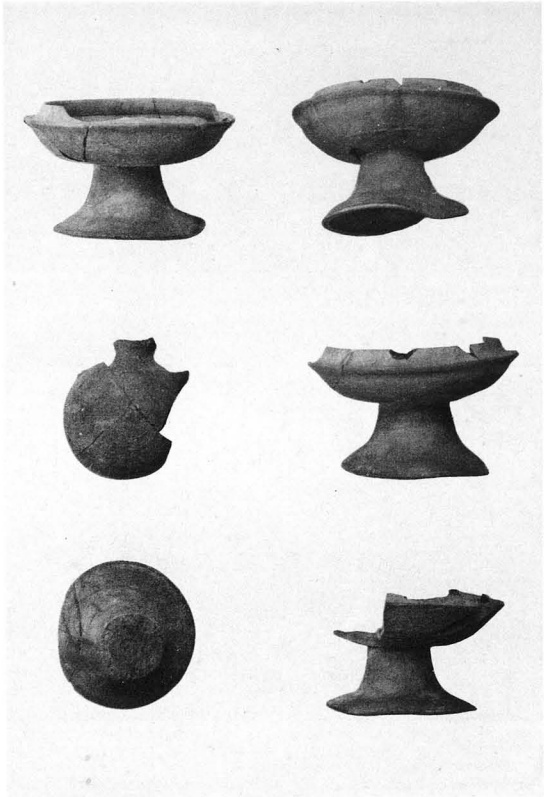
刀子　右（第6号墳）　中（第4号墳）　左（第5号墳）



馬具　左（第５号墳）　右上（第５・６号墳）　右下（第７号墳）

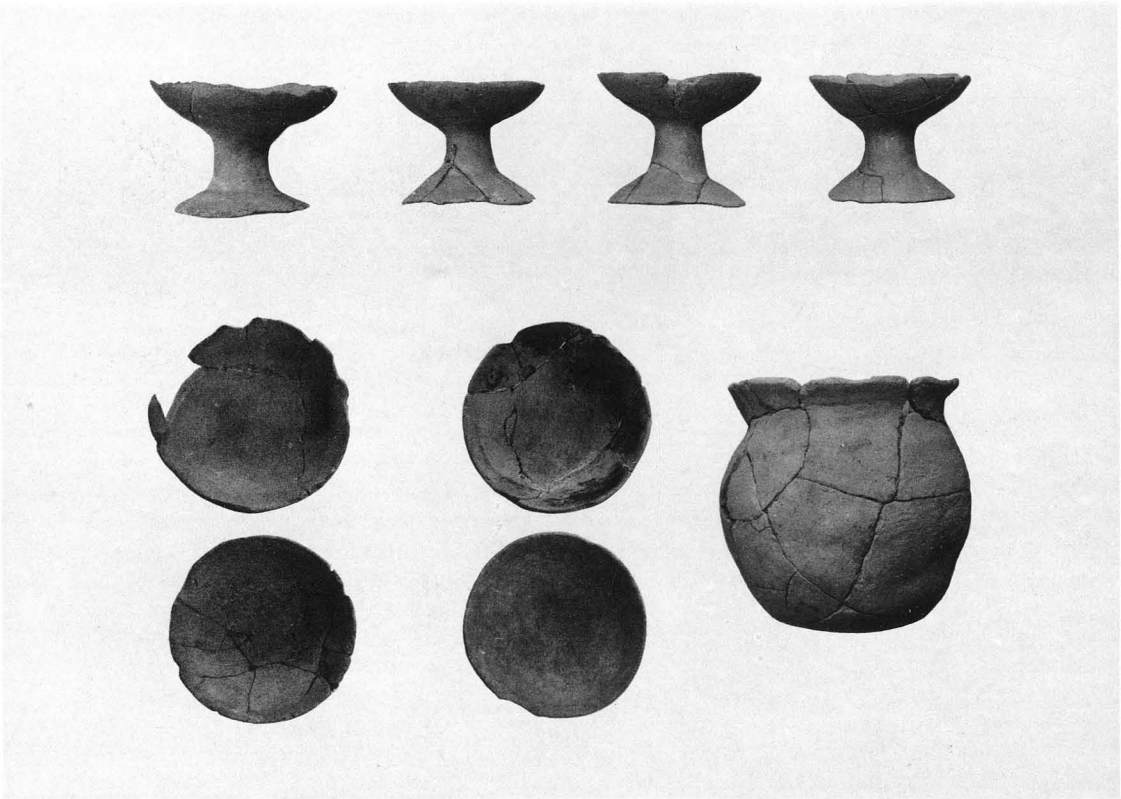


鍍金馬具破片（第６号墳）



須恵器（C 地区）

須恵器（第 4 号墳）



土師器（第 4 号墳）

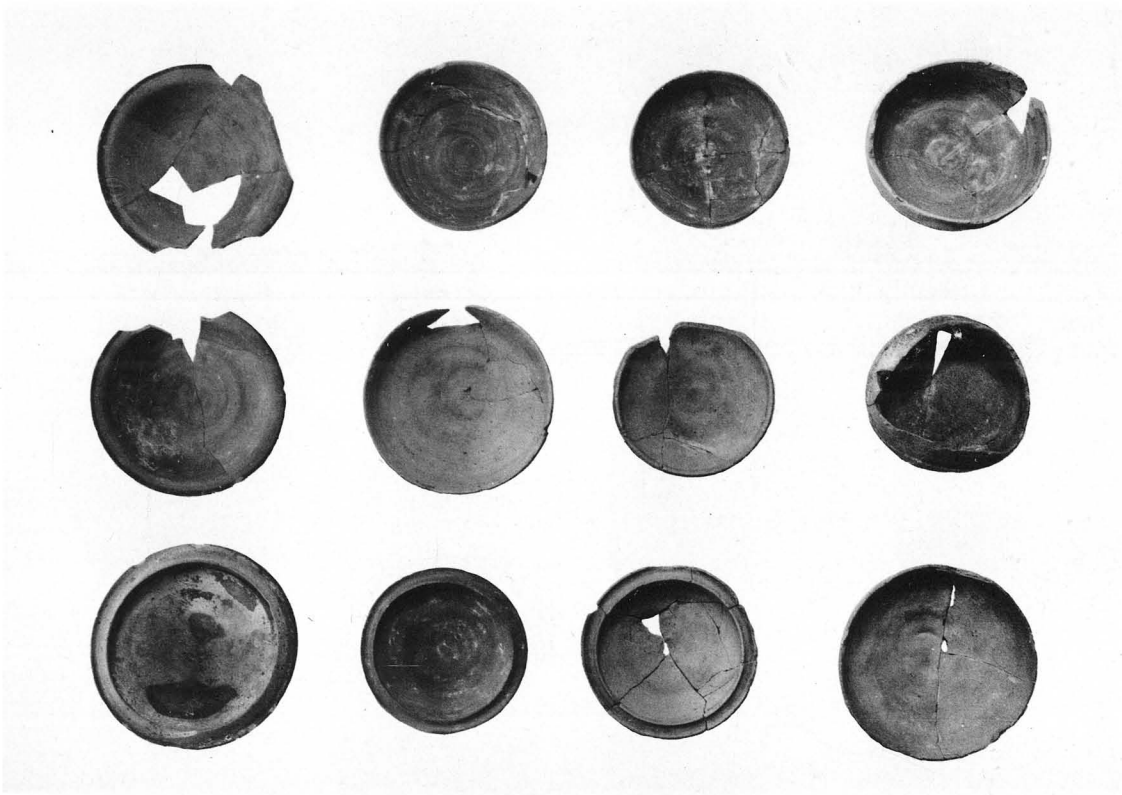
須恵器（第５号墳）

須恵器（第５号墳）

須恵器（第5号墳）

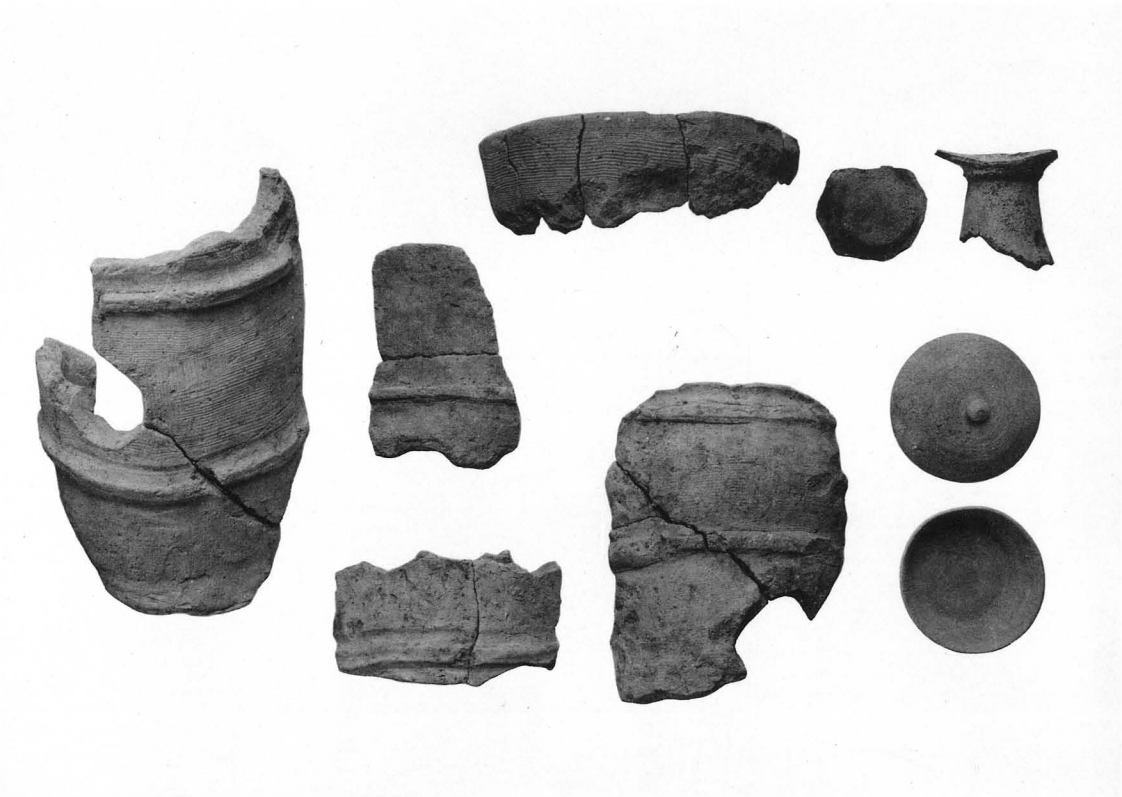
土師器（第5号墳）

須恵器（第6号墳）



須恵器（第6号墳）

須恵器（第7号墳）



埴輪破片土師器須恵器（L地点）

須恵器 左（第9号墳）右上（O地点）右下（第8号墳）　軒先平瓦P地点

昭和三十六年三月

草津市山寺町北谷古墳群発掘調査概報

編集兼発行者　大津市東浦一番町　滋賀県教育委員会事務局社会教育課

印刷者　京都市下京区油小路通綾小路下ル　有限会社　真陽社　代表者　中村友吉